

# 小平図書館友の会 会報 35号



発行日 2015年11月15日  
発行者 小平図書館友の会会長 剣持 香世

ブログ <http://yamaoji.cocolog-nifty.com/kltomonokai/>

## もくじ

巻頭寄稿「来館困難者への宅配サービス」中央図書館長	1
講演会報告 谷津矢車さん講演会 2015. 5. 23	2
赤坂憲雄さん講演会 2015. 9. 13	2
文学散歩 明治大学博物館・阿久悠記念館 2015. 6. 25	5
「図書館ボランティアの活動をご存知ですか？」	6
学習会報告	
声に出して本を読む会 / 読書サークル・小平	7
図書館について学ぶ会 / YAを楽しむ会	7
図書館協議会報告	8
第18回 定例総会報告 2015. 10. 4	8



2015. 10. 4 第18回定例総会  
(小平市中央図書館視聴覚室)

## 新しく始まる「来館困難者への宅配サービス」 中央図書館長 湯沢瑞彦

小平市立図書館では、11月1日から、図書館資料の宅配サービスを開始します。対象は、図書館に来館できない65歳以上で要介護3以上の高齢者の方です。

図書館に来館できない方に対するサービスは、これから、図書館としても力を入れていく必要があると考えており、第3次子ども読書推進計画の中にも新たに組み込んでいくことにしています。

この宅配のサービスは、小平の図書館の特徴である「15分歩けば図書館が利用できる」というネットワークを活かして8館の中央館と地区館それぞれを拠点として、ボランティアの方に担っていただければと、市報などで募集の案内をしたところ、20の方に参加をいただきました。

10月8日に説明会を開催しましたが、自己紹介の中で参加の理由として、「いつも図書館にはお世話になっているから」と何名もの方におっしゃっていただき、とてもありがたく、また、うれしく思いました。

今年は小平市立図書館開館40周年にも当たり、図書館友の会、子ども文庫連絡協議会、武蔵野美術大学の学生さんの協力を得て、各館で企画した記念行事も実施します。

この行事を通して、これまで図書館を利用されたことのある方にはより一層、また、利用した事のない方には、知っていただくきっかけとなればと考えています。そして、小平市立図書館を利用していただく方が、ひとりでも増えればと考えています。

友の会の皆さんも、ぜひお近くの地区館にお出かけください。

## 谷津矢車さん講演会

2015年5月23日(土) 小平市中央図書館

### 「こんなに面白い徒然草」

5月23日(土)青梅市出身の若手歴史小説家の谷津矢車さんの講演会がありました。古典文学は高校で勉強したはずですが先生がおじいちゃんだったせいかほとんど記憶から飛んでいます。その後も古典に触れる機会が全くなかったのが今回の講演会はそれを少しでも挽回すべく聞かせていただきました。



徒然草と言えば作者は吉田兼好、とこれは反射的に出てきます。が、実は確かなものではないと聞いて驚きました。書かれてから約100年後に再評価され世に出ることとなったそうです。徒然草は今でいうエッセイ集。「有職故実」(ゆうそくこじつ)という朝廷や武家のしきたりを題材にしたものが多いの

ですが現代でも通じるいくつかの話を聞くことが出来ました。

\*

谷津さんは「笑える徒然草」としてお坊さんの意外な発想、位の高い人に付けたあだ名、不適切なたとえ話などを取り上げ解説されました。また「不思議な徒然草」では役人が毎日食べていた大根に助けられる話や豆の殻と豆の口げんかを、「ぐっとくる徒然草」では家は夏に合わせて建てると良いという話や雙六に勝つ極意、神社仏閣へは夜に参るとすいていて良いなどの話を面白く話されました。徒然草には妖怪ものが出てこないとの話は意外でした。それは鎌倉、室町と戦乱の続く世だったからで、妖怪、お化けの類が出てくるのは比較的平穏な世が続いた平安時代、江戸時代中期以降、それからまさに現代とのお話しでした。(そういえばうちの孫も「妖怪ウォッチ」に夢中です。)

\*

質問時間には「谷津矢車」はペンネームであることや小説を執筆する時は子ども用図鑑が分かり易くかつ正確で頼りになるという話などで盛り上がりました。来場者は約80名。アンケートによりますと、若い感性での解説が魅力であるという意見の反面ももう少し深く分析してほしいとの意見もありました。29歳の講師の今後に期待します。

(剣持香世)

## 赤坂憲雄さん講演会

2015年9月13日(日) 小平市中央図書館

### 「遠野物語から会津物語へ」

民俗学者で「東北学」の提唱者、学習院大学教授、福島県立博物館長、遠野文化研究センター所長などを兼任されている赤坂憲雄さんに講演していただきました。9月13日(日)、会場は定員を超えるお客様で埋まりました。

震災後、赤坂さんが「会津学研究会」の女性たちと取り組んできた「会津物語」(朝日新聞福島版連載)が1冊の本になるのでその話をしたい、とのこと。これは会津のおじいちゃん、おばあちゃんたちから

不思議な話を聞き書きして一話800字にまとめたもので新聞連載は100話を超え、赤坂さんにとって大切な仕事になったそうです。8月はじめ『会津物語』(朝日新聞出版)がちょうどいいタイミングで刊行されました。百話収録されています。

講演では、柳田国男の『遠野物語』から『会津物語』へと流れるテーマを静かな語り口で、ときにユーモアをまじえながら話され、満員の聴衆を魅了しました。感想をまじえながらご紹介します。

——遠野物語について——

いろいろな土地で遠野物語について話をすると、その土地の老人から「そういう話ならここにもある」と言われますが、これは半分正しくて、半分正しくないのです。民話とか昔話は多くの村にありましたが、ほとんど残されてきませんでした。105年前(明

治40年代)には遠野物語のような話は日本中いくらでもあったのに、きちんとした形でまとめられることがなかったのです。

『遠野物語』が生まれた時代には、昔話／伝説／神話／世間話／民話といった区別がなく、さまざまな話が集められています。いわば「ごった煮」「カオス」の状態で混沌としています。だから面白い。

民俗学も説話・伝承研究もなかった時代。『遠野物語』は発行当時、350部の自費出版だったため手にとって読める人は限られていました。昭和10年に続編の「遠野物語拾遺」とあわせて再刊され、ようやく広く読まれるようになりました。その頃には、分類の網の目がかぶせられ交通整理されてしまいました。分類や研究は「生きられた話に影を落としている」と赤坂さんはおっしゃいます。



——あれは隣りのアンチャだった——

このあと話された若い頃の体験談が、とても面白く興味深いものでした。長くなりますが紹介します。

32歳の冬、はじめての著作『異人論序説』を出版した頃、山形県大蔵村の森 繁哉さん(舞踏家で土方巽の弟子)という人から手紙で講演の依頼がありました。雪深い山里の薪ストーブのある家が、生まれてはじめての講演会場でした。赤坂さんは「姥捨て」の話をしようと意気込んでいたのですが、そこにいたのは……なんと10人ほどのおばあちゃんたちでした。(会場笑い)

目論見がみごとにはずれ、しどろもどろになった赤坂さんを見て、依頼者の森さんが「話すのは無理そうなので、おばあちゃんたちの話を聞いてみては？」と助け船。今では聴き取りのプロですが、当時まだ若く経験のとぼしかった赤坂さん。「大蔵村にはカッパの話はありますか？」と切り出したところ、おばあちゃんたちの冷たい反応。重ねて「山男に里の娘がさらわれる話は？」……あるわけないよ、という顔をされたそうです。すっかり意気消沈した赤坂さん。そろそろお開きに、となったとき、ひとりのおばあちゃんが突然こう言いました。

「オレは若い頃にカッパを見たことがある。夕暮れどきに村の畑に出てみると、そこにカッパが立っ

ていた。カッパはパンツ一丁で、口にきゅうりをくわえて、オレの方を見た」……その場は凍りつきました。続いて衝撃的なひとこと。「あれは隣りのアンチャだった」(会場笑い)

この話をどう受け取るか——赤坂さんが井上ひさしさんと対談したとき、この話をしたところ井上さんは大笑いして「それは見事なおチですね」と言ったのですが、赤坂さんは「ちがう」と思いました。おチなんかではない、と。そのおばあちゃんの表情は真剣でした。カッパも隣りのアンチャも、おばあちゃんにとっては「まぎれもない真実」だったのだと赤坂さんは思いました。おばあちゃんはサービス精神からではなく、この話を生まれて初めて思い切って打ち明けたのです。——赤坂さんは、おばあちゃんと隣りのアンチャとの間の性的なものを感じたようです。カッパにはエロティックなイメージがある、と。

このできごとは「困り果てていた僕へのおばあちゃんからの最高の贈り物だったと思います」。赤坂さんにとって「東北へ向かう原点」となった体験でした。講演後半の「会津物語」につながる赤坂さんの立ち位置がこの逸話にこめられていたのだった、と私が気づいたのは講演が終わってからでした。

——事実譚——

ところで、講演前の控室で持参の本を並べた赤坂さんからとつぜん「誰か朗読していただけませんか？」と言われ、その場に居合わせた友の会事務局の伊藤規子さんが引き受けてくれました。

『遠野物語』から2話、伊藤さんの朗読です。

遠野物語 55話——カッパの子を産んだという不思議な話。作り話とか単なる昔話ではなく旧家に起こった実際の話です。具体的にどの家のことなのかわかる内容で、今ならとても活字にできません。まちがいがなく裁判沙汰になることでしょう。

\*

川には川童多く住めり。猿ヶ石川殊に多し。松崎村の川端の家にて、二代まで続けて川童の子を孕みたる者あり。生れし子は斬り刻みて一升樽に入れ、土中に埋めたり。其形極めて醜怪なるものなりき。女の婿の里は新張村の何某とて、これも川端の家なり。その主人人に其始終を語り。……(中略)……此家も如法の豪家にて〇〇〇〇と云ふ士族なり。村会議員をしたることもあり。

(新潮文庫『遠野物語』より、原文のまま)

赤坂さんは「事実譚」という言葉を黒板に大きく書きました。おそらくこの話は、婿をとった旧家の女性が以前つきあっていた男のこどもを（夜這いによって）妊娠・出産した事実をカッパ（河童・川童）の仕業に置きかえたものでしょう。旧家のスキャンダルがこのような形で残ったのです。

もうひとつ、遠野物語 99 話——明治の三陸大津波で妻と子を亡くした男が、ある夜（たぶん新盆の夜）、妻と、妻が昔つきあっていた男（男が婿入りする前につきあっていた男、やはり津波で死亡）の幽霊にであった話です。妻の口から二人があの世界で夫婦になっていると聞き男は衝撃を受けて病気になるます。

東日本大震災のあと、赤坂さんはこの話をいつも思い出しながら三陸を歩いていたそうです。

ここで赤坂さんは「和解」という言葉を出されました。赤坂さんが読んだラフカディオ・ハーンの小説のタイトルの「和解」でした。

この男（北川福二という実名が記されています）は、おそらく、幽霊を見たことをイタコに話し、それが家族に伝わったのではないかと。他人に話すことで、妻が結婚した後も昔の男のことを忘れられなかった、そう秘かに思い続けていた辛さから逃れることができたのではないかと。そのように赤坂さんは推測し、これは「和解」だと思ったそうです。

精神医療の学会で話したところ、ある先生から「和解という考え方にとても共感できます」と言われたそうです。その先生はそういう症例を治療した経験があったからです。似たような話を、震災後、赤坂さんも身近に見聞きしたそうです。

\*

遠野物語にまつわる話が続きます。

アラスカの学生たちが『遠野物語』の英語版を読んで「不思議だ」という感想と「懐かしい」という感想をもったと聞き、衝撃を受けたというエピソードを紹介されました。懐かしい……この物語の背景にある世界が国家／民族／文化を超えた共通の体験、「物語の水脈／鉱脈のようなもの」に触れているのではないのでしょうか、とおっしゃいます。

こういう背景があって「遠野物語」のような本を編集してみたいと思うようになったそうです。

「事実譚」（事実、ある人があるとき何かの体験をしたという話）を集めてみたかった、と。一時間半にわたるお話の最後、ようやく「会津物語」にたどり着きました。



### ——会津物語——

会津には「キツネに化かされた（バカにされた）話」がたくさんあるそうです。「キツネにバカにされた」というのは、キツネと人間の背丈が同じなので。「会津学」という雑誌を通して知り合った女性たちに、そんな話を集めてみようよと持ちかけたところ、やってみようということになったそうです。

印象的だったのは、会津地方での聞き書きについて「なんとか間に合った」という言葉。震災後、こんなことをしていいのだろうかと思いつきながら始めた会津での聞き書き。こんな時期に、と批判されることを覚悟していたそうですが、かえって励ましてくれる人が多かったそうです。

現在ならもう語り手になってくれる人を探すのが難しいのではないかと。そういう意味で「間に合ったね」と、会津学研究会の女性たちと話したそうです。

本になった『会津物語』から二話、急きよ用意したコピーを配り紹介されました。第1話「ヤマンバユウ」（ヤマンバ：山姥、ユウ：岩）と第80話「大きな白い鳥」を赤坂さんご自身の朗読で。

聞き書きに携わった会津の女性たちに、こころを開いてさまざまな「事実譚」を語るおじいちゃん、おばあちゃんたちの姿が目につくような、いい話が集められている本です。小平の図書館にもありますので、ぜひお読みください。

\*

最後に福島第一原子力発電所の爆発事故を体験した後、身の丈の知恵／技を見直す時期になったのではないかと、そのように考えるようになりました、と結ばれました。

30分ほどの質疑応答時間では3人の方からの感想・質問にひとつひとつ丁寧に答えられ、ご自身の考え方・とらえ方をゆっくり話されました。身の丈に合った生活とは原始時代に戻ろうというのではなく、「風土と最新のテクノロジーの結婚」、たとえば再生可能エネルギーを使う「会津電力」という運動をいま始めているそうです（具体的にはバイオマス）。

赤坂さんは柳田の『遠野物語』に敬意を払いながらも、それとは違う立ち位置から現代の『会津物語』に取り組まれたことがよくわかりました。「百年たつて柳田国男の作った遠野物語は終わった、終わらせるべきだ」という言葉が印象に残りました。

講演後のアンケートでも好評。お忙しいなかを講演していただいてよかったですと思いました。

（入山弘之）

文学散歩 明治大学博物館  
阿久悠記念館  
2015年6月25日(木)

久しぶりに晴天のなか大学めぐり第2弾の文学散歩に参加しました。

JR 御茶ノ水駅 10時集合。徒歩 10分で明治大学博物館へ。16人の参加者を3グループに分けて学芸員さん達が丁寧な説明をして下さいました。

「商品」の部分では染織品、漆器、陶磁器などについて原材料、製造過程の説明。卓越した職人技により伝統的工芸品が残されていることに感動でした。

「刑事」の部分では古代から江戸及び明治初期に至るまでの高札、長柄三道具、十手など、まじかに見ることができました。小学生の見学者も来ていましたが過去の非人間的な刑罰を回顧することにより次世代の人権教育に生かしてほしいと願いました。

「考古」の部分は 1949年岩宿遺跡発掘以来、明治大学が数々の調査の歩みと成果により日本考古学の発展を担っていたことを確認しました。破片を集め少しずつ作り上げたという大型埴輪も見られて良かったです。

11時半を過ぎる頃「阿久悠記念館」へ誘導していただき、日本を代表する作詞家の多数の日本レコード大賞や作家としての業績に至るまで1万点に及ぶという関係資料、執筆していた部屋などを興味深く見せて頂きました。

正午近くなりリバティタワー17階食堂で昼食。そこはパスタ、麺類、和洋食、デザートまで揃い大喜びでした。



明治大学食堂前での集合写真

午後 1 時に再び集合。希望者は山の上ホテル (Hilltop Hotel) 見学。故池波正太郎氏など思い浮かべますが近頃は伊集院静氏がよく訪れているとのこと。

木製家具のあたたかい感じのインテリアがおしゃれで素敵でした。

最後に「ニコライ堂」の名で知られる東京復活大聖堂へ行きました。

大主教ニコライによって 1891年(明治 24年)ジョサイア・コンドル博士設計の下建てられ 1923年(大正 12年)関東大震災でドームは崩壊するも聖堂を復活させました。

日本では有数のビザンチン様式の建築で 1962年に国の重要文化財に指定されています。

現在も毎日曜日 10時~12時半まで混声四部合唱で祈禱があり 200名程の信者が来ているそうです。日本文化を学び正教会として伝道した聖ニコライは 75歳で永眠し 1970年に聖人とされました。十字架の説明なども詳しくして下さいました。

2時頃には全ての日程も終りととても有意義な嬉しい一日となりました。

(石戸紀久江)



明治大学からニコライ堂を望む  
(スケッチ：会員 山内志津子さん)

## 図書館ボランティアの活動をご存知ですか？

小平市中央図書館の2階にボランティア室があります。ここではボランティアさんたちが傷んだ本の修理などにあたっています。10月21日のボランティア活動日にこの部屋を訪ねてみました。

1階のカウンターでチェックされた修理が必要な本はこの部屋に運ばれます。この日もブックトラックいっぱいにたまっていました。

### 【写真上】

装丁崩れやページ剥がれ【写真中】、のど割れ（本を綴じてある部分が損傷していること）、破れなどが指示書に書いてあります。修理に関してボランティアさんは図書館職員から研修を受けます。修理方法はマニュアルにまとめられ、統一されています。



それを基に一冊一冊を丁寧に修理し出来るだけ元の姿に戻していくのです。ほとんどが糊付けだけ行う繊細な作業です。



### 【写真下】

鉛筆で書き込みのある本は消しゴムで消しますが、「何ページにもわたる書き込みや線引きには本当に腹が立ちます」とボランティアさんはおっしゃっていました。ボールペンやマーカー、蛍光ペンで書き込まれているものはお手上げです。本の種類から見てほとんどが大人の仕業のようです。このほかにも水濡れや飲み物と思われるシミなど修理が不可能なものもあります。利用者が破れた個所に貼ったセロテープは劣化し、剥がれ、やがて変色して始末に悪いのですがこれは最近減ってきているそうです。



\*

多くの利用者に読まれた本が古くなり傷んでくるのは仕方ありませんが、公共の本ということ意識してその取扱いには十分注意を払いたいものです。

そして人知れず黙々と修理作業を担うボランティアさんの存在も心にとめておきたいと思いました。

\*

ボランティアさんの仕事は修理だけではありません。この日はクリスマスおはなし会に配る小物の製作もしていました。図書館職員の方の指示で作るのですが時には提案をすることもあるそうです。

またリーフレットの整理にも携わっています。これは金・土・日曜の読売新聞に折り込まれている広告の中から小平市に関する広告類だけを日付順にファイルしていくものです。50年、100年経ったときに、例えば2015年頃の土地の価格やモノの値段がわかる貴重な資料となるのです。こういった収集も公共図書館の大事な役割なのだと知りました。



\*

ボランティアの活動日は水曜日の午前、午後と木曜日の午前です。この中で自分の都合の良いときに活動できます。ボランティアさんたちはみな本好きなので情報交換も楽しいそうです。

(取材 剣持、入山)

## 中央図書館サービス担当から 図書館ボランティアさんへのコメント

毎週水曜日に図書の修理等、毎週木曜日の午前中に新聞広告折り込みの整理を行っていただいております。平成26年度は補修・修理について、3,446冊のうち1,270冊の図書を修理していただきました。この他にもおはなし会のプレゼントづくり等に協力いただいております。図書館の業務は職員だけでできるものではなく、ボランティアさんのお力によって支えられています。日頃から感謝申し上げるとともに今後も継続して活動していただけるよう配慮してまいりたいと思っております。



# 学 習 会 報 告

## 声に出して本を読む会

～11月 小金井でサロン風発表会～

発足11年目の「声に出して本を読む会」は、今年も3月7日、西東京「コール田無」で第10回発表会を開催し、引きつづき3月22日には「なかもちテラス」新築開館記念行事にも参加、日常的には、おおむね月2回の演習を続けています。

継続できている理由は、構成員の意欲とともに、ご指導いただく各分野の専門家をはじめ、何よりも小平図書館友の会会員各位と、視聴者市民のご参加に支えられている、と認識しています。

当面の日程は、11月20日（金）、21日（土）の両日に分けて、それぞれ午後1時半（開場・午後1時）から、小金井市緑町「ブルーメンハウス」で、小規模（定員30名）ながら、サロンの雰囲気の中で、新企画の発表会を開催することとしています。

ご披露する内容は、随筆（野呂邦暢）をはじめ、浅田次郎、山本周五郎、重松清、深沢七郎、樋口一葉、連城三紀彦、レオ・バスカリア、と、幅広い内外の作家の作品を、チェロ、ピアノの演奏にも支えられ、一生懸命読むことになっています。

（雑崎亮平）

## 読書サークル・小平

「読書サークル・小平」は原則として隔月（奇数月）の第三日曜日午後に開催しています。

主宰の大森さんを中心に課題本を決めて感想を話しあったり、その時々のお話の本や出来事をテーマに気楽にお喋りします。大森さんの博識からも学ぶところの多い読書会です。

今期は、9月の赤坂憲雄さんの講演会にあわせて柳田国男の「遠野物語」を解説した三浦祐之・赤坂憲雄の共著書を7月に、9月には戦後70年にちなんで映画化された『日本のいちばん長い日』をとりあげました。

課題本は、よく読まれている旬の本の中から新書・文庫の手に入れやすいものを選んでいきます。

参加資格はありません。課題本を読み込んでいなくても大丈夫。会員以外の方も参加しています。お知り合いとご一緒にぜひご参加ください。

（入山弘之）

—5月～9月の課題本—

- 5月 『世界史の極意』佐藤優著（NHK出版新書）
- 7月 『遠野物語へようこそ』三浦祐之・赤坂憲雄著（ちくまプリマー新書）
- 9月 『決定版 日本のいちばん長い日』半藤一利著（文春文庫）

## 図書館について学ぶ会

7月に過去の図書館見学を冊子にまとめ、「近隣の図書館案内」として会員に配布しました。これには所在地、開館情報などの基礎データとともに、見学に参加したメンバーの感想を記してあります。また新たな見学先として8月に東大和市立中央図書館に行ってきました。ここは昭和59年の開館です。窓を大きく取り、明るい室内に書棚や机、カウンター、ブックトラックまで木材を使用した、心の安らぐ図書館です。2階のレファレンス室は広く、資料も充分にあり、特に地域資料は充実していました。また東大和市は地形上交通の便が悪く、移動図書館車みずうみ号が二週間に一度、五か所の拠点を巡回しています。

いろいろな図書館を見学し、職員のお話を聞くたびにそれぞれの地域に根差した工夫と知恵があふれていてそのオリジナリティーに感動します。これからも続けて行きたいと思います。会員の方ぜひ一緒に行きませんか？

また図書館について学ぶ会では、小平市の図書館で11月から始まる来館困難者へのボランティアによる宅配サービスを、障がい者サービス学習会とともに注目し考えていきたいと思っています。

（剣持香世）

## YAを楽しむ会

「YAを楽しむ会」では、毎月ヤングアダルトの本を2冊読み、メンバー（毎回10名前後）で自由に感想を述べ合っています。1冊を1時間位かけて話し合っていると、夫々の感想に共感したり新鮮に感じたり、時には本の根底の深い部分の意味に気づかされたりして、大勢で同じ本を読む醍醐味を感じます。また、本筋から離れて脱線することもあります。それはそれでメンバーの人となりを知ることができ、ともかく楽しいのです。5月のYAの会は、2月の会で読んだムーミンシリーズから「ムーミン童話」の世界観を表現した飯能市（埼玉県）のあけぼの子ど

もの森公園へ皆で出かけました。自然の森に囲まれた公園の中で、心から解放され、童話の中に入ったような気分が楽しめました。1冊の本から世界が広がり、幾つになっても共感できる仲間がいることは嬉しいことです。

(内田清子)

—5月から10月に読んだ本—

- 5月 あげぼの子ども森公園へ行く
- 6月 『三つのミントキャンディ』ロベール・サバティユ著／『あまねく神龍の住まう国』荻原規子著
- 7月 『花や、咲く咲く』あさのあつこ著／『パンとバラ』キャサリン・パターソン著
- 8月 『イッカククジラがきた浜辺』マイクル・モーパーゴ著／『フランケンシュタイン』メアリー・シェリー著
- 9月 『ツバメ号とアマゾン号』アーサー・ランサム著／『ガラスの家族』キャサリン・パターソン著
- 10月 『千年鬼』西條奈加著／『わたしたちの島』アストリッド・リンドグレーン著

## 図書館協議会報告

前年度末で協議会委員の任期が切れた人が多く、2015年度は総員12名の内、新任6名と新しい顔ぶれで図書館協議会がスタートしました。女性委員は6名のうち新任が3名と男女共同参画にも配慮した構成です。

2015年度の新事業を掲げますと、仲町テラスの円滑な運営（機能の異なる図書館、公民館の融合の新しいモデル構築、ICタグ、WIFI等の活用等）、2015年度から新計画に代わる「第3次子ども読書推進計画」、障がい者への図書館資料宅配サービス、平櫛田中氏所蔵資料の図書館での利用者への提供等があります。盛りだくさんの新事業の中で今年度目立つのは「事業計画1、基本方針」のところに「司書の確保」「司書の充実」という言葉が入っている点かもしれません。具体策が上がっているわけではありませんが、司書の必要性について折に触れ意見を述べてきた図書館協議会委員の声を反映してくれたのかと嬉しい気分です。学校司書も学校図書館法上の位置づけを得ましたが、学校図書館協力員との兼ね合いもあり、東京都の出方待ちになっています。

現在試行中の開館時間の拡大について2016年度はどうするかですが、夏休みにアンケートを取り、現在アンケート数値の集計解析中です。

国会図書館の電子図書閲覧に関しては既に書類提出済みで、国会図書館での審理待ちです。国会図書館の承認があり次第、中央図書館の参考室で閲覧できるようになります。

これからの図書館サービスについて目が離せなくなってきました。

(塚本健男)

## 小平図書館友の会 第18回総会報告

10月4日(日)に中央図書館視聴覚室で総会を行いました。来賓として湯沢瑞彦中央図書館長が出席してくださいました。議長は菊地征夫さんをお願いし、議事は全て承認されて新しい年度がスタートいたしました。

11月には小平市図書館40周年記念イベントとして「図書館川柳」を募集し、中央図書館に掲示した句の中から来館者にお気に入り投票していただく予定です。また来年のなかまちテラスまつりには好評だったビブリオバトルを予定しています。今年度も友の会の趣旨に沿って楽しい交流や活動を行い、小平の図書館とともに歩みたいと思います。

(剣持香世)

来春も実施!



2016年 第18回  
チャリティ古本市

2016年 3月26日(土) 10時~17時

3月27日(日) 10時~15時

会場 小平市中央公民館ギャラリー

一冊 30円、50円~

読み終えて不要になった本を  
寄付してください

単行本・新書・文庫本・児童書・全集・雑誌等  
(週刊誌類、古い百科事典、CD・カセットを除く)

寄付本受付 3月23日~25日 10時~16時  
小平市中央公民館ギャラリー

お問い合わせは 会報表紙記載の連絡先まで